

敦煌故事賦「燕子賦」訳注(2)

—ツバメ、

スズメ一家の横暴を鳳凰に訴える—

田 村 祐 之

姫 路 獨 協 大 学

国際言語文化論集 第6号 抜刷

2025年2月 発行

敦煌故事賦「燕子賦」訳注(2)

ー ツバメ、スズメ一家の横暴を鳳凰に訴えるー

田 村 祐 之

今回訳出した^①のは、スズメ一家に新居を奪われ、さらに殴られ大怪我をしたツバメが、百鳥の王である鳳凰に訴状を出し、スズメの無法なふるまいを訴え出る場面である。

「燕子賦」の特徴の一つとして、ツバメ夫婦やスズメ一家をはじめとする、登場人物（登場鳥物？）の大胆な「擬人化」がある。例えばツバメ夫婦は冒頭で“雙燕翱翔”〔ツバメの夫婦が飛び回る〕とツバメらしく空を飛びまわったかと思うと、新居を建てる場所を決めるのに“東西步度，南北占詳”〔東西に歩いて土地を測り、南北を見て吉凶を占う〕と人間のごとく土地の大きさを測り、その吉凶を占う。また“取高頭之規，壘泥作窟”〔高い梢の枝を取ってきて、泥を塗り重ねて巣をつくる〕とツバメらしく木の枝と泥で巣作りをするかと思えば、“上攀梁使，藉草為床”〔梁を渡して屋根を葺き、草を敷いて床を作る〕と人間のごとく屋根を葺いたりする。一方スズメはどうかといえば、留守にしているツバメの新居を一家で占拠し、“硬努拳頭，偏脱胳膊”〔スズメはぐっと拳を突き出して、片肌脱いでみせる〕と「拳」をつきだし片肌脱ぐ（つまり服を着ている）。そしてツバメもスズメも、人間の言語によってコミュニケーションしていることは言うまでもない。スズメは“耕田人打兔，蹠履人吃臙”古語分明，果然不錯”〔「百姓が兔を捕まえ、やんごとなき人がそのスープをいただく。」と昔の人も言ってるが、全くその通りだな。〕と、昔の人（鳥？）の言葉まで引用してみせるのである。

鳥を擬人化した作品としては、『詩経』「豳風」の「しきやう鵲しきやう」が最初期のものだろう。ふくろう鵲ふくろうに巣を壊され雛を連れ去られた親鳥の嘆きの歌である。漢代には故事賦「神鳥賦」「窮鳥賦」などが生まれた。「神鳥賦」は、1993年に江蘇省連雲港市の尹湾漢墓から出土した竹簡に記されていたものである。ストーリーは以下の通り。

釈』と表記

- ・訳注で他の文献から引用する場合、漢語原文をダブルクォーテーションで囲んで示す。必要に応じて日本語訳を〔 〕で原文の後ろに付す。

夫妻相對，氣咽聲哀。

夫婦は顔をつき合わせ、声を詰まらせ哀しげに泣く。

「不曾觸犯豹尾¹，緣沒²横羅（罹）鳥災³？」

「豹尾^{ひょうび}の神の方位を犯したわけではないのに、どうしてこんな忌々しい目にあうんだろう？」

遂往鳳凰邊⁴，下牒分析⁵。

そこで鳳凰のもとに向かい、訴状を提出してお裁きをお願いする。

「燕子單貧⁶，造得一宅。

「ツバメは貧しい身ながら、住まいを建てました。

乃被雀兒強奪，仍自更着⁷恐嚇。

すると／ところがスズメに住まいを奪われ、続けてさらに脅されました。

云：『明敕括客⁸，標入正格⁹。

スズメが言うには、『流民の実態調査を行う詔勅^{みことのり}が下され、正式に法律に組み込まれたぞ。

阿你¹⁰遁逃¹¹落籍¹²，不曾見你膺¹³王役¹⁴。

おまえは故郷から逃げて戸籍も抹消されており、おまえがお上の徭役に服したのを見たことがない。

終遣官人棒脊¹⁵，流¹⁶向擔崖象白¹⁷。』

しまいには役人を派遣してきておまえの背中を棒でぶたせ、儋崖象白^{さいはてのち}に流刑にするだろうよ。』

云：『野鵲¹⁸是我表丈人¹⁹，[] [求鳥] 鳩²⁰是我家伯²¹。

そして『カササギは俺の従兄叔父^{いとこおじ}、ハトは俺の父方の伯父だ。

州縣長官，瓜羅親戚²²。

州や県の長官は、みな俺の遠い親戚だ。

是你²³下牒言²⁴我，共²⁵你到頭無益。

お前が訴状を出して俺を訴えても、お前にとって結局なんの得にもならないぞ。

火急離我門前，少時終須喫摑²⁶。』

とっととうちの入口から離れろ、ぐずぐずしてたらしまいにや殴られるぞ。』

と言ったのです。

燕子不分²⁷，以理從索²⁸。

ツバメは納得できず、道理を述べて家を返すよう求めました。

遂被撮頭拖曳²⁹，捉衣撻臂³⁰。

するとスズメは私の頭の羽毛をつかんでひっぱり、服をつかんで引きちぎりました。

遼亂尊拳³¹，交横秃剔³²。

そして立派な拳固を振り回して殴り、縦からも横からも蹴ってきました。

父子數人，共相歐擊。

スズメは親子何人かで、いっしょになって殴ったり蹴ったりしてきました。

燕子被打，傷毛墮翮³³。

ツバメは殴られて、羽毛は傷つき抜け落ちてしまいました。

起止不能，命垂朝夕。

寝たきりになってしまい、明日をも知れぬ命です。

伏乞檢驗，見有青赤³⁴。

どうか私の体をお調べください、傷跡だらけなのは一目瞭然です。

不勝冤屈，請王科責³⁵。」

このような不当な目に合うのは我慢できません、どうか公明正大なお裁きを。」

鳳凰云：「燕子下牒，辭理懇切。

鳳凰は言います、「ツバメの訴状、書き方が丁寧で道理が通っている。

雀兒豪橫，不可稱說³⁶。

スズメの横暴なふるまいは、とうてい言葉で語りつくすことはできない。

終須兩家，對面分雪³⁷。

最終的には両者を対面させ、それぞれ釈明させることにしよう。

但知臧否³⁸，然³⁹可斷決。」

どちらの言い分が正しいかわかりさえすれば、判決を下すことができる。」

專差□□〔包鳥〕鶻⁴⁰往捉。

そこでモズをスズメ逮捕に差し向けた。

(以下次号に続く)

〔本文注〕

- ① 前回の訳注は、田村「敦煌故事賦「燕子賦」訳注(1)―ツバメ夫婦、スズメ一家に新居を乗っ取られる―」(『姫路獨協大学国際言語文化論集』第5号 42～64 ページ、2024年2月)を参照。
- ② 伏俊璉『俗賦研究』(中華書局、2008)の「漢魏六朝故事俗賦考述」を参考にした。

〔訳注〕

- ¹ 豹尾：管見の限りでは、先行研究での解釈はおおむね二つに分かれる。一つは“豹尾”を“豹尾槍”“豹尾幡”と解釈し、皇帝もしくは高官の儀仗、すなわち朝廷の権威と贈灸するものである(『通釈』、『江校』、『選注』)。これに従えば、原文“不曾觸犯豹尾”は「御上の権威をないがしろにしたわけではないのに」と解釈できる。もう一つは“豹尾”を、前回登場した「太歳」「將軍」(田村「敦煌故事賦「燕子賦」訳注(1)」参照)のような天神の一つで、建物の修築の際にその方位を犯してはならない神である、と解釈する(陳治文「敦煌変文釋詞商兑」〔『語言研究』1989年第1期〕、『校注』、『読本』)。これに従えば、「(家の修築を司る)豹尾神の方位を犯したわけではないのに」と解釈できる。ここでは、前段でツバメ夫婦が新居の場所を決めるのに「太歳」「將軍」を避けるとしていたことから、後者に従って解釈した。
- ² 縁没：『通釈』『校注』『読本』『選注』いずれも、“没”を“麼”として“什麼”と解釈し、“縁没”を“為什麼”“因為甚麼”の意とする。
- ³ 鳥災：“鳥”を『通釈』『選注』は罵語とし、『太平広記』卷二七三「李秀蘭」項所引『中興間氣集』に見える唐代の用例、および『水滸伝』に見える“鳥男女”などの例を挙げる。『校注』も『通釈』を引用して罵語と解釈する。また『選注』『校注』は、この“鳥”はスズメが「鳥」である(ツバメもそうなのだが)ことと罵語のダブルミーニングであるとする。

いっぽう『通釈』は、このセリフは、ツバメが皇帝の儀仗を犯したわけではないのこんなひどい目にあったことを「鳥災」といって憤慨しているのであり、スズメに殴られたことを「鳥災」といっているのではない。なぜならツバメは自分たちを鳥ではなく「人」とみなしているので、「鳥」という語でスズメを指し、さらに「鳥災」と称することはありえないからだ、とする。

『通釈』の解釈にも一理あるが、訳者が「燕子賦」を一通り読んだ印象では、登場する鳥たちは擬人化されてはいるが、鳥としての特徴も残している。

例えば冒頭（前回参照）には「仲春二月，雙燕翱翔。」〔春半ばの二月、ツバメの夫婦が飛び回る。〕とあって空を飛び、また後段は“燕子被打，傷毛墮翻。”〔ツバメは殴られて、羽毛は傷つき抜け落ちてしまいました。〕とあって羽毛を落としている。一方でツバメとスズメは相手をつかんだり殴り合ったりしている。これは、現代の漫画やアニメーションで、擬人化された鳥のなかには、空を飛ぶにも物をつかんだりするにも翼を使う者もいる、ということを感じ起こせば理解しやすいのではないか。

例えばチャールズ・M・シュルツの「Peanuts（ピーナッツ）」（アニメ版）では、主役犬スヌーピーの親友である小鳥のウッドストックは、翼を使って空を飛び回ったかと思えば、同じ翼を使って物をつかんだりもする。またウィリアム・ハンナ&ジョセフ・バーベラのテレビアニメ「Tom and Jerry（トムとジェリー）」の一本「The flying cat（トム君空を飛ぶ）」では、鼠のジェリーの友人であるカナリアが、猫のトムに追いかけてられて翼を使って空を飛んだかと思えば、同じ翼でマッチを持って火をつけたり、ジェリーと握手（握翼？）をしたりする。彼らの翼は、飛ぶ機能と物を持つ機能の2つを同時に実現しているのだ。

「燕子賦」に登場するツバメやスズメ、その他の鳥たちも、ウッドストックやカナリアと同じように、翼を手としても使えると考えれば、“鳥災”の“鳥”は「鳥」と罵語のダブルミーニングと解釈してよいと思う。

- 4 邊：『敦煌變文集』にはこの字の次に“下”字があるが、『校注』『選注』ともに衍字として削除している。ここでは『校注』に従う。
- 5 下牒分析：“下牒”は訴状を提出すること、“分析”は審理し判断すること。百鳥の王である鳳凰に訴状を提出し、審理判断を願うことである。
- 6 單貧：身分が低く貧しいこと。
- 7 着：この“着”は受け身の用法。受け身の“着（著）”の用例は魏晉南北朝時期からあらわれはじめ、唐宋時期には口語的要素の強い文献に多く見られるようになる。田春來『近代漢語“著”字被動句』（『語言科學』第8卷第5期（総第42期）517～524ページ、2009年9月）、劉海波『“着”字被動句的來源』（『安陽師範學院學報』2019年第4期99～102ページ、2019年8月）などを参照。
- 8 明敕括客：他の土地に逃亡した流民（逃戸）の実態調査を行う詔勅。則天武后の時代から逃戸の増大が問題となっており、玄宗の開元九年（721）、監察御史の宇文融が逃戸の実態調査を行った。逃戸のうち、逃亡先で良民（主戸）のもとに身を寄せた者を客戸と呼び、全国調査を行ってこの客戸を把握し（括客）、客戸には100日以内に自首を促す。自首した客戸のうち、帰郷を希望

する者は故地の戸籍に戻し、逃亡先の居住を希望する者は現地の戸籍に編入した。また自首しなかったものは辺境の地に移し、その地の戸籍に編入した。『旧唐書』『宇文融伝』、『冊府元龜』卷六十三の開元九年二月乙酉項の詔勅を参照。

“明”は『選注』『読本』では「明らかに、はっきりと」と解釈し、『校注』は“美辭”とする。『旧唐書』『冊府元龜』などでの“明敕”の用例を見ると、いずれの用法もあると思われる。ここではスズメが、皇帝の權威をかさに着てツバメを不利に追い込むセリフと考え、『校注』に従う（ただ訳語には反映できていない）。

- 9 標入正格：正式に法令に組み込むこと。唐代の法律体系は「律」（刑法）「令」（行政法）「格」（律令を補う追加法令および詔勅）「式」（律令の施行細則）からなり、上の「括客」もこの「格」に正式に組み込まれたことを指す。
- 10 阿你：『選注』は“阿”を人称代名詞の前に置かれる語助詞とし、“阿你”はすなわち“你”の意とする。
- 11 逋逃：『選注』『校注』は、“逋”は“浮”に同じとし、『読本』も“逋逃”を“逃亡”と説明する。
- 12 落籍：『選注』『校注』『読本』ともに、故地から逃亡したことで戸籍から名前が抹消されることと説明する。
- 13 膺：引き受ける、担当する。『校注』は“膺”を“膺”に通じるとする。
- 14 王役：朝廷から課せられる徭役。唐代の税制は中央から課せられる租（穀物の納付）、庸（労役または絹布の納付）、調（布類の納付）、および地方官庁から課せられる雑徭（労役）があった。これらの税目は労役に換算することもでき、最大で年間90日と推定される。気賀澤保規『中国の歴史6 絢爛たる世界帝国 隋唐時代』（講談社、2005；講談社学術文庫、2020）第四章「律令制下の人々の暮らし」を参照。
- 15 棒脊：背中を棒で打つ刑罰。唐代の刑罰は隋代に定められた「五刑」（ち・じょう 杖・徒・流・死）を踏襲している。「笞」はむち打ち、「杖」は棒で打つこと、「徒」は強制労働、「流」は流刑、「死」は死刑。
- 16 流：前注で述べた「五刑」のうちの「流」、すなわち流刑。訳注8で述べたように、客戶のうち100日以内に自首しなかった者は辺境に移されるが、スズメはこれを流刑のようなものとみなしてツバメを脅しているのだろう。
- 17 擔崖象白：「江校」は“擔”を“儋”とする。“儋”“崖”“象”“白”いずれも州名で、儋州と崖州は海南島に、象州は今の広西チワン族自治区に、白州は今の広東省に置かれていた。いずれも辺境の環境劣悪の地とされ、『旧唐

書』には流刑の配流先としてこの四州の名が頻出する。なお『旧唐書』「地理志」の慶州の項に“懷安 開元十年，檢括逃戶置，因名懷安。”〔懷安 開元十年に、捕縛した逃戸をここに移住させた。そのため「懷安」と名づけた。〕とある。慶州は今の甘肅省慶陽市にあたる。すべての客戸が懷安に送られたかどうかはわからないが、上記の四州とはかなり離れており、むしろ四州と比べて長安に近い土地である。これも、スズメがツバメを脅すために、長安から遠く離れた、配流先として有名なこの四州を挙げたのだろう。

- ¹⁸ 野鵲：“鵲”はカササギ。『校注』は“野鵲為鳥鳴，當因生活在野田而得名，曹植等皆有樂府詩野田黃雀行。本賦之雀兒當為家雀，故稱野鵲為「表丈人」。「鵲」乙卷作「雀」。”（“野鵲”は鳥の名で、田畑に暮らしているのでそう名づけられたのだろう。曹植らはみな樂府詩「野田黃雀行」を詠んでいる。燕子賦の“雀兒”はスズメのことだと思われるので、“野鵲”を従兄伯父と呼ぶのだ。“鵲”は乙巻では“雀”とする。〕としている。『校注』は“野鵲”を田畑で暮らすスズメの仲間と解釈しているように読める。

周晟「敦煌俗賦《燕子賦》《百鳥名》鳥名釈義商補」（『敦煌研究』2019年第4期）は、唐、元稹「有鳥二十章」詩の十二「有鳥有鳥名老鳥」や宋、歐陽脩「野鵲」などを引いて古人がカササギを“野鵲”と記すこと、また『爾雅』郭璞注および郝懿行義疏を引いて、“黃雀”はコウライウグイスもしくはヒワを指すと考えられることから、「燕子賦」の“野鵲”をカササギもしくはオナガとする。

管見の限り“野鵲”のもっとも古い用例は、『漢書』「外戚伝下」の“乃昔之月，鼠巢于樹，野鵲變色。”である。小竹武夫はこの“野鵲”を「野に住むカササギ」と訳している（小竹武夫訳『漢書』下巻「列伝Ⅱ」による）。唐代には“野鵲”の用例が少なくない。例えば韋応物「鶯奪巢」に“野鵲野鵲巢林梢，鳴鶯恃力奪鵲巢。吞鵲之肝啄鵲腦，竊食偷居還自保。鳳凰五色百鳥尊，知鶯為害何不言。霜鵲野鵲得殘肉，同啄膾脰不肯逐。可憐百鳥紛縱橫，雖有深林何處宿。”とあり、ここでは“野鵲”は「燕子賦」におけるツバメのごとく、巢を奪われる（しかも食われてしまう）立場に描かれる。

これらのことから、“野鵲”はカササギと解釈してよいと考える。

- ¹⁹ 表丈人：『読本』は“指中表亲戚里的男姓长辈。”〔祖父の女兄弟の子、もしくは祖母の兄弟姉妹の子の中の、父より年長の男性親族を指す〕とする。日本語では「従兄伯父／従兄叔父（いとこおじ）」と呼ぶ。

- ²⁰ □□〔求鳥〕鳩：『読本』および『校注』に引く江蘭生校は“□□〔求鳥〕”と“鳩”を分けて2種類の鳥とし、“□□〔求鳥〕”は“鸛鵒”（ハッカチョウ）、“鳩”は

“斑鳩”（ハト）や“雉鳩”（キジバト）のこととする。ハッカチョウ（八哥）はスズメ目ムクドリ科の鳥。全長約27cm、全体が黒い。翼に白い筋があり、飛行時にこの筋が八の字に見えるので「八哥」の名がついたとされる。四川省、河南省南部以南、ミャンマー、タイ、インドシナ半島などに分布する。（ハッカチョウについては小学館『日本大百科全書 ニッポニカ』を参照した）『選注』は“[𪇔][求鳥]” 1字に“同“鳩”，即鳩鴒，俗八哥。”と注し、やはりハッカチョウとする。明言はしていないが、“[𪇔][求鳥] 鳩”をハッカチョウとハトの2種類としているようである。

『校注』は『集韻』に“鳩、鸛、[𪇔][求鳥]，權俱切，鳥名。”と、また『広韻』に“鸛，亦鸛鵒。”とあるのを引き、“[𪇔][求鳥] 鳩”を“鸛鵒”ではないかとするが、“鸛鵒”がどのような鳥か管見の限りではわからない。“鸛鵒”の誤記であれば、ハッカチョウを指すことになる。あるいは『集韻』に依って“鸛”を“鳩”に置き換え“鳩鵒”とすると、『文選』に載せる左思「魏都賦」に“推惟庸蜀與鳩鵒同窠，句吳與電黿同穴”という例を見出すことができる。高橋忠彦は“鳩鵒”を“鳩”と“鵒”の2種類の鳥としているが、日本名は示していない（高橋忠彦『文選（賦篇）中』（『新釈漢文大系』80、明治書院、を参照）

周晟前掲論文は“鸛鵒”を“鳩鵒”“鸛鳩”と書く例が諸書に見えないことから「燕子賦」の“[𪇔][求鳥] 鳩”をハッカチョウと解釈するのは不正確であるとし、“[𪇔][求鳥]”字は構成要素や音の類似から正しくは“鳩”字であるとする。そして『方言』や『広雅』を引いて、“鳩鳩”は古代西北地方でハトを指す語であったとする。

ここでは周氏に従い、ハトと解釈する。

- ²¹ 家伯：「燕子賦」後段に“鸛鵒在傍，乃是雀兒昆季。頗有急難之情，不離左右看待。既見鸛子唱快，便即向前填置：「家兄觸誤（忤）明公，下走實增厚愧，切聞狐死兔悲，惡（物）傷其類（以下略）」とあり、スズメの“昆季”（兄弟）である“鸛鵒”（セキレイ）が、スズメのことを“家兄”と呼んでいる。ここから類推するに、“家伯”はスズメの伯父を指すのではないか。そして前段でカササギを“表丈人”（従兄叔父）、つまり姓の異なる親族としているので、こちらの“家伯”は現代中国語でいえば“堂伯（父）”、つまり父方の（＝同姓の）伯父を指す、と考えた。
- ²² 瓜蘿親戚：遠い親戚。『選注』『校注』は“瓜蘿”を、瓜や藤のつるのように伸び広がるさまとする。
- ²³ 是你：『選注』は“是”を、句頭の人称代名詞に前置する無義の語助詞とする。

- ²⁴ 言：『選注』は訴える意とする。
- ²⁵ 共：『校注』は介詞の“對”〔～について、～にとって〕と同義とする。『選注』は「江校」をもとに“恐”〔おそらく〕に直している。ここではスズメは州や県の長官がみな自分の親戚なのだから、ツバメが訴状を出しても受理されるはずがない、と言ってツバメを脅しているのだから、“恐”では脅しの効力が少し弱まるのではないかと考え、『校注』に従った。
- ²⁶ 少時終須喫摑：“少時”は短い時間を表す。“摑”は手でたたくこと。“喫”は受け身を表す。この句は前句を受けて、ツバメがしばらく門口でぐずぐずするなら、しまいにはスズメに殴られる、ということであろう。
- ²⁷ 分：『選注』は“不服氣”、『校注』は“不服”と解釈し、いずれも不服である、納得しない、ということを表す。
- ²⁸ 從索：管見の限りでは辞書類には見えない語で、他人に何かを要求する意と考えられる。鄭波は“從”について『世説新語』『任誕篇』に載せる「劉伶病酒渴甚，從婦求酒。」〔劉伶は酒の飲み過ぎで体を壊し、のどが渴いてたまらないので、妻に酒をくれと頼んだ。〕の例を挙げ、“從”に“向”の用法があると指摘する。また『百喻經』卷三「伎兒作樂喻」の“譬如伎兒。王前作樂。王許千錢。後從王索。王不與之。”（下線は田村による）〔例えば芸人が、王の前で技を披露して楽しませた。王は千錢を与えた。のちに芸人が王に金を求めたが、王は与えなかった。〕を引いて、“從索”は“向……索取”〔……に（モノを）求める〕の意であるとする。鄭波「敦煌變文《燕子賦》詞語詮釋五則」（『漢字文化』2018年第16期）を参照。

付言すれば、管見の限りで“從”+（人）+“索”のもっとも古い例は、『三国志』に見える。「魏書・華佗伝」に以下のようなエピソードがある。ひどい咳と咯血に悩まされていた軍吏の李成が華佗に相談したところ、薬を二服処方してもらい、一服を服用して快癒する。数年後に李の親類が同じような病にかかり、李に残りの一服を譲ってくれるよう頼み、以下のように言う。“先持貸我，我差，為卿從華佗更索。”〔まず私に薬を貸し与えてくれ。あとで人を遣り、あなたのために華佗を尋ねて薬を求めさせよう。〕李は薬を親類に与え、のち薬を再び調合してもらおうと華佗を訪ねるが、華佗は“適值佗見收，忽忽不忍從求。”〔折あしく曹操に捕らえられていたので、李は慌てたが、薬の調合をお願いするのは忍びなかった。〕ここでは“從”+“華佗”+“索”の形で現れる。

“從索”の形では、鄭氏が引いた『百喻經』のほか、『三国志』「魏書・賈逵伝」の裴松之注ほか魏晋南北朝期以降の文献に用例が散見される。

- ²⁹ 撮頭拖曳：「選注」は“撮”を“抓，捉”〔つかむ〕とする。「読本」は“撮頭”を“揪头发”〔髪の毛をつかむ〕とする。“撮頭拖曳”で髪の毛（あるいは頭の羽毛？）をつかんで引きずり回す意。
- ³⁰ 撻拏：「選注」「校注」「読本」いずれも引き裂く意とする。“撻”は“扯”に、“拏”は“掰”に同じ。
- ³¹ 遼亂尊拳：「校注」は“遼亂”を、下句の“交横”と同じく多いさまを表す語とする。“尊拳”は相手の拳骨をふざけて丁寧に表現した言い方。日本語にすると「お拳固」のような感じか。ただ訳文にするのは不適当に思うので、「立派な拳固」と訳しておいた。
- ³² 交横秃剔：「交横」は縦横に交錯するさま。“秃剔”について、「選注」は“應是擊打之義”〔強打する意であろう〕とする。「校注」は“剔秃”に作る鈔本があることに触れ、江藍生校の“應作『踢突』（或者『突踢』）。踢突是足蹴、脚急出。”を引く。江校に依れば“秃剔／剔秃”は蹴る意となる。「校注」はさらに、「燕子賦」後段にとあることから、二語を連綿語として、“疑為欺負之意”〔いじめる、無理強いする意ではなかろうか〕とする。「読本」は本文を“突踢”に改め、“用脚踢”〔足で蹴る〕とする。
- 前句の“遼亂尊拳”が拳で殴ることなので、この句の“秃剔”は足で蹴る意に解釈するのがよいと考える。
- ³³ 傷毛墮翻：“毛”“翻”は鳥の羽毛。唐、劉禹錫「和董庶中古散調詞贈尹果毅」詩に“鸞禽毛翻摧，不見翔雲姿”〔猛禽の羽毛は抜け落ち、天翔ける姿を見ることがもない〕の例がある。
- ³⁴ 見有青赤：“見”を「選注」は“現”と同じとする。“青赤”は「選注」「校注」ともに傷跡とする。
- ³⁵ 科責：法に照らして判決を下し処罰すること。
- ³⁶ 不可稱説：漢訳仏典に散見され、“～不可稱説”の形で「～について言葉で語りつくすことはできない」の意で使われるようである。多くは称賛するのに使われるが、いっぽうで東晋、竺仏念訳『出曜経』に“漸増生老病死愁憂苦惱不可稱説”〔年老いて病気になり死んでいく、愁いや苦しみは語りつくすことはできない〕という例もある。ここではスズメの横暴について、言葉で語りつくせないほどひどいということであろう。
- ³⁷ 分雪：釈明する、弁解すること。
- ³⁸ 臧否：「選注」は“是非，善惡”とする。
- ³⁹ 然：「通釈」「選注」「校注」ともに“乃”と解釈する。
- ⁴⁰ □□〔包鳥〕鷦鷯：鳥の名。敦煌本『百鳥名』に“□□〔包鳥〕鷦鷯”の名が見え、

同じ鳥を指すと思われるが、どのような鳥か記述はない。“𪇔 [包鳥]”は“鵒”の異体字。『説文解字』「鳥部」の“鵒”字の説解に“𪇔 [鳥包], 鵒或从包。”とあり、段注に“古𠂔聲包聲同在三部,《管子》《周禮》注皆作𪇔 [包鳥]。”〔古くは“𠂔”と“包”の音はどちらも（『六書音均表』二の）三部に属している。『管子』『周礼注』はいずれも“𪇔 [包鳥]”とする。〕とある。

劉瑞明「敦煌抄卷《百鳥名》研究」は、『爾雅』郭璞注や『埤雅』を引いて“𪇔 [包鳥] 鵒”が“鵒鵒”の誤記である可能性を指摘する。“鵒鵒”は後漢、班固「西都賦」に見え、中山千秋『文選 賦篇 上』（新釈漢文大系78、明治書院、1977）は“鵒鵒”に「まなづる」とルビを振っている。『漢語大詞典』は“鵒鵒”を“水鳥名。似鶴，蒼青色。亦称麋鵒。”と説明しており、やはりマナヅルを指すようである。

いっぽう周氏前掲論文は“𪇔 [包鳥] 鵒”を“伯勞”（モズ）の音借とする。“伯勞”は“博勞”“百勞”“伯趙”“百鵒”“伯鵒”“不刺”などとも書かれる。“𪇔 [包鳥]”と“伯”は双声の関係であり、“鵒”と“勞”は声母が来母で上古音では同じ宵部に属し、中古音でも同じ効摂に属する。また、この文の後段（次回訳出予定）に“𪇔 [包鳥] 鵒奉命，不敢久停。半走半驟，疾如奔星”〔“𪇔 [包鳥] 鵒”は命を受けて、すぐに出発した。駆けたり走ったり、流れ星のような速さで行く。〕とあり、まさにスズメ科の鳥の飛び方で、同じスズメ目に属するモズに当てはまる、とする。

「燕子賦」後段、この“𪇔 [包鳥] 鵒”が、スズメ一家がツバメ夫婦から強奪した家に到着すると、慌てたスズメが“𪇔 [包鳥] 鵒”を家に招き入れて休憩してもらおうとする場面がある。“𪇔 [包鳥] 鵒”がマナヅルであれば、体の大きさから、ツバメが作った家には到底入れないので、モズの方がふさわしいだろう。

ただ、スズメが動転のあまり、到底家に入れそうもないサイズのマナヅルを招き入れようとする笑いどころ、と考えれば、マナヅルの可能性もある。これについては次回解決できればしたいところである。今回は、モズと訳しておく。

敦煌故事賦《燕子賦》译注(2) —燕子向凤凰控诉麻雀横行霸道—

Hiroyuki TAMURA

本文为去年发表的《敦煌故事賦「燕子賦」译注(1)》的续篇。这次笔者翻译了燕子被麻雀一家占据新居并遭受暴力，之后向百鸟之王凤凰控诉麻雀横行霸道的一段内容。同时，本文还涉及到了在古代中国文学作品中鸟类被拟人化的情况。

